

「目を覺してワッといへ。目を覺してワッと。己はもう行く……」

(斷篇第十六)

戦闘が始まつてから、もう八日目になる。過る週の金曜に始まつて、土曜、日曜、月曜、火曜、水曜、木曜と過ぎて、又金曜が来て其も過ぎたが、まだ戦闘は止まぬ。兩軍の兵數十萬、それが相對して一步も退かずに、凄まじい音を立て、息氣をも續がず破裂彈を打ち合ふので、刻々に生人が死人になつて行く。段々轟々と絶えず空氣を撼る

其砲聲に、空も動搖んで眞黒な夕立雲を呼び、雷霆は頭の上で激めくけれど、敵も味方も此處を先途と討ちつ討たれつしてゐる。人は三晝夜眠らんと、病を得て物も覺えぬやうになるといふのに、況して是はもう一週間も眠らずに居るのだから、皆狂氣になつてゐる。であるから、苦しいとも思はない、退かうともしない、一人残らず討死して了ふ迄は、奮闘せんとするのだ。風聞に據ると、某隊では彈藥が盡きて、石を投げ合ひ、拳で殴り合ひ、犬のやうに咬み合つたと云ふ。若し此戦闘の參加者で生還する者があつたら、狼のやうに牙

が生えてゐやうも知れぬが、恐らく生還者は有るまい、皆狂つてゐるから、一人残らず討死してしまはう。皆狂つてゐる。頭の中が顛倒して何も分らなくなつて居るから、若し急にグルッと方向を變へさせられたら、敵と思つて味方に發砲しかねまいと思はれる。

奇怪な噂がある：奇怪な噂で、怖ろしくもあるし、只だ事でないと思つて虫が知らせたから、皆蒼くなつて、ひそくと叫く。あゝ、兄に聞かせたい、皆赤い笑の噂だ。聞けば、幻しの部隊が現はれたと云ふ。いづれも何から何迄生人と些とも違はぬ

亡者の集團だ。夜は狂つた人達が霎時の夢を結ぶ時、晝は晴れた日も黄泉と曇る戦の真最中に、忽然と現はれて、幻しの砲で發砲して、怪しの砲聲に空を撼ると、生きてはゐるが、氣の狂つた人達が、事の不意なのに度を失つて、死物狂ひに其幻しの敵と戦ひ、怖れて取逆上せて、一瞬の間に白髪になり、紛々と死んで行く。幻しの敵は忽然として現はれて、又忽然として消え失せる。と、寂然となつた跡を見れば、散々に形の害はれたまだ生々しい死骸が、狼藉と地上に横つてゐる。敵は果して何者だつたらう？ 敵の果して何者だつた

かを、私の兄は知つてゐる筈だ。

二度目の戦闘も終つて、四下は寂然となる。敵は遠方だ。それなのに、闇夜に突然ドンと一發怯えたやうな筒音がする。それツと跳起きて、皆暗黒の中へ發砲する、——久らく、何時間といふ間寂として音沙汰のない暗黒の中へ發砲する。暗中に何を認めめたのか？ 怖ろしくも物狂ほしい無言の姿を現した無氣味な者は抑も何者だ？ 之を知つてる者は兄と私とだけで、まだ他の人は知らな

でせう？ 此様なに澤山狂人の有つた事はまだ聞いた事がない。

「此様なに澤山狂人の有つた事を聞いた事がない」といつて、皆蒼くなる。今も昔も變らぬと思つて居たいのだ。遍く人の良智を無理に抑へて居る力は銘々の果敢ない頭の上へは及ばぬと思つてゐたのだ。

「昔だつて、何時だつて、戦争はあつた、しかし曾て此様な事はない。戦争は生存の理法だ」と斯ういつて皆澄して落着いてゐるけれど、其癖皆蒼くなつてゐる、皆眼で醫者を捜してゐる、皆狼狽

へた聲で、水を、早く水を、と叫んでゐる。

人は皆内に動く良智の聲を聞くまいとして、無意味な事に争ひ負けて其分別の鈍り行くのを忘れやうとして、ならば白痴になりたいと思ふ。戦地では刻々に人の死に行く今日此頃、私は如何しても安閑としてゐられぬから、其處ら中世間を駆廻つて、人の話も随分聞いた、なに、戦争は遠方だ、我々には關係はないといつて、故意とらしく微笑する人の面も随分見た。が、それよりも多く出逢つたのは、虚飾を去つた眞實の恐怖である。心細い苦い涙である、「この狂暴の殺戮はいつ止めるの

だ！」といふ、絶望の物狂ほしい叫聲である。人が大なる良智に力一杯腸を絞られて、最後の祈禱、最後の呪咀を唱へ出す時、能く此叫聲を發する。

久しいこと、或は數年になるかも知れぬが、足踏みしなかつた去方で、狂氣になつて後送せられた一將校に出逢つた。同窓の友なのに、私は見違へた位で、産みの母さへ分らなかつたと云ふ。一年も墳穴に埋つてゐて再び此世に出て來たとて、かうはあるまいと思はれる程の變り様で、頭も白く、全く白くなつて了つてゐた。面貌は餘り變つてもゐなかつたが、黙つて聽耳を立てゝゐる其面

色は世離れして、人間とは縁遠く怖ろしげなので、言葉は掛けるさへ無気味になる。如何して氣が違つたのだといふと、親戚の聞込んだ所では、彼の隊が豫備隊となつて、隣りの聯隊が突貫した事がある。大勢が駈けながら、ウラー、ウラーと喚く。大聲に喚くので、殆ど銃聲も聞えなくなつた程だつたが、其中にふと銃聲が止む、——ウラーが止む。寂然と墓の如く静かになつたのは、敵の陣地に走り着いて、彌と白兵戦が始まつたのだ。彼は此時寂然となつたのに堪へなかつたのだと云ふ。今では側で話をしたり、叫んだり、騒いだりし

てゐると、落着いて聴耳を立て、何かの聞えるのを待つてゐるが、一寸でも閑かになると、我と我頭に撈りつくやら、壁や家具へ駈上らうとするやら、癡癡めいた發作を起して藻掻く。親戚が多いので、其等が交るゝ病人を取巻いて騒いでやつてゐるが、それでも夜がある、長い音のせぬ夜があるから、父親が夜を引受ける。これも矢張白髪頭の少し氣の變な親仁だが、チクタクの音の高い時計を幾つとなく壁に掛連ねて、たがひ違ひに間断なく時を打たせてゐたが、近頃では絶えずパチパチといふやうな音を出す輪を仕掛けてゐるさう

な。まだ二十七だから、全快すると思つて、望を將來に繋けてゐるから、今では家内が寧ろ陽氣である。軍服は着せないが、瀟洒した服装をさせて、見ともなくないやうに仕て置いてやるから、白髪でこそあれ、面相はまだ若々しく、舉動も力の脱けたやうに悠然と品が好く、物思ひ貌に凝と注意してゐる形は寧ろ美しい。

始終の話を聴いて、私は側へ行つて、その男の蒼白い、萎えくとした、もう刃を揮翳すこともない筈の手に接吻したが、之には誰も目を側てる者もなかつた。唯友の若い妹が目に微笑を含むで

私を見たばかりだつたが、それから其娘が、許嫁でもあるやうに、私の跡を追廻して、此世に掛易のない男のやうに私を慕ふ。餘り慕はれるので、私も不覺眞暗なガランとした家に、獨居よりも厭な思をしてゐる事を話さうとした程だつたが、人の心といふものは愛想の盡きる物だ。何時だつて絶望してゐる事はない。娘の計らひで差向ひになつた時、其人が優しく、

「まあ、貴方のお顔色の悪いこと！ 眼の下に環が出来てますよ。お加減でも悪いのですか？ それともお兄様がお可哀さうでならないの？」

「兄ばかりぢやない、人間が皆可哀さうです。尤も少し加減も悪いが……」

「私し貴方が兄の手に接吻なすつた譯を知つてますよ、——皆は氣が附かなかつたやうですけど。あの、何でせう、兄が狂氣だから、それでいせう？」

「さうです。狂氣だから、それでいす。」

娘は凝と思案に沈む、——その様子が兄に酷肖であつた、——只迥然と若いばかりで。

「私し」と娘は言淀むでサツと赤面したが、伏目にもならないで、「私し貴方のお手に接吻したいわ。」

許して下さつて？」

私は娘の前に膝を突いて、

「祝福して下さい。」

娘は聊か顔色を變へて身を引いたが、唇ばかりで囁くのを知ると、

「私し信者ぢやないわ。」

「私だつてもそれは然うだ。」

娘の手が一寸私の頭に觸れた。それが濟むと、

「私し戦地へ行つてよ。」

「それも好いでせう。しかし到底も耐へられまい。」

「それは如何だか知れないけど、だつて貴方も兄も然うだけど、戦地の人だつて打遣つて置く譯には行きませすまい？ 罪も何もない人達ですもの。貴方、私を忘れちや下さらさない？」

「決して。貴嬢は？」

「私もそんなら、御機嫌よう！」

「もう二度とはお目に掛れまい。御機嫌よう！」
死にも狂氣にも尤も畏るべき處がある、——それを私は経過したやうな心持がして、ホッとした。氣も落着いた。久し振で昨日は、怖ろしいとも何とも思はず、平氣で家へ入つて、兄の書齋の戸を

開けて、其筐の机に對して、久らく椅子に倚つてゐた。夜中にドンと何かに衝かれたやうな心持でふと目を覺すと、乾いたペン先が紙上を走る音がしたが、私は驚かなかつた。殆ど微笑せぬばかりの心持になつて、心の中で、

「澤山お書きなさい。ペンも乾いたのぢやない、生々しい人間の血潮を含んでゐる。原稿も白紙のやうに見えやうが、其方が寧ろ好い。何も書いてないだけに無氣味で、聰明な人達が種々な事を書立てるよりも、戦争や理性に付いて多くを語る。お書きなさい、く、澤山お書きなさい。」

：今朝新聞を讀むで見ると、まだ戦闘が止まぬので、私はまた薄氣味悪くなつて来て、心が落居ず、宛然腦の中で何かガタリと落ちたやうな心持がした。その何か向ふから来る、近くなる、――もうガランと明るい家の敷居に立つてゐる。あゝ、彼の人が懐かしい、何卒私の事を忘れて呉れるな。私は氣が違ひさうだ。戦死三萬、戦死三萬：

(断篇第十七)

：市内も何となく血糞い。判然した事は分らぬけれど、何だか怖ろしい噂がある：

(断篇第十八)

今朝新聞を見ると、澤山の戦死者の姓名が出てゐる中で、一人知つた名前がある。それは私の妹の許嫁の一將校で、亡兄と一緒に召集された人だ。一時間後に配達夫が投込んで行つた手紙を見ると、兄へ宛てたもので、表書の書風で分つたが、その戦死した妹の許嫁から來たのだ。死人が死人へ手紙を寄越したのだ。けれども死人が生きてる人に文通したよりまだ勝た。これは私が現に逢つた去る婦人の身の上だが、その息子が砲弾に粉塵され

て無残な最期を遂げたのを新聞で知つてから、全
一ヶ月の間毎日其息子から手紙が来る。優らしい
息子で、手紙にはいつも優しい事を書いて母を慰
めて、何か幸福を得る望みあり氣な若い愛度氣な
い事ばかり言つて寄越す。此世の人ではないけれ
ど、これが悪魔の几帳面といふものか、毎日缺が
さず此世の事を書いて寄越すから、母親は遂に悴
は戦死したのでないと思ひ出した。が、ふと音信
が絶えてから、一日二日三日と過ぎ、それからも
死黙に入つて、何時迄待つても音沙汰がないので、
母親は両手で古風な大形のピストルを取上げて、

胸へ丸を打込んだと云ふ。助かつたやうにもいふ
が、私は能くは知らぬ。判然した事を聞かずに了
つた。

私は久らく封筒を眺めてゐたが、考へて見ると、
此封筒も曾て故人の手に觸れた事があるのだ。何
處でか之を買はうとして、錢を持たせて従卒を、
何處かの店へ遣つたのだ。故人は此手紙の封をし
てから、或は自分でポストへ入れたかも知れぬ。
で、郵便といふ複雑な機關が運轉し出して、手紙
は森や野や市街を餘所に見て、只管目的地を指し
て走る。最後の日の朝、手紙の主が長靴を穿いた

時、手紙は走つてゐた。主が戦死した時にも、手紙は走つてゐた。主が穴へ投込まれて死骸が土の下になつた時にも、消印を帯びた灰色の封筒の中に身を忍ばせて、靈ある幻の如く、手紙は森や野や市街を餘所に見つゝ走つて、かうして今私の手の中に在るのだ。

手紙の文句は下の通り。鉛筆で幾片かの紙の切端に書いたもので、結末も附いてゐない。何か邪魔が入つたものと見える。

（…今となつて始めて戦争の大に楽しむべき所以を知つた。利口な、狡猾な、裏表のある、肉食動物

中の肉食動物より、遙かに味のある人間といふやつを殺す樂しみは、古風な原始的な樂しみで、鎮長に人の生命を奪ふといふ事は、行星なんぞを抛げてテニスを行ふよりも、愉快なものだ。君は哀れだ。僕は君が僕等と俱に在ることを得ずして、無味な平凡な日を送つて、無聊に苦しむ身の上になつたのを悲しむ。君が高尙な精神から、安きを偷んで居られずして、永く求めた所のものは、死地に入つて後、始めて獲られる。血に酔ふといふこと、比喻は稍古めかしいが、眞實は反て這裏に在る。僕等は膝まで血に蘸り、此赤葡萄酒に酔つて

チロ／＼目になつてゐる。赤葡萄酒とは名譽ある僕の部下の兵が戯れに命じた名だ。人の生血を飲むといふ風習は、人の思ふ程、馬鹿氣たものではない。古人も承知して行つた事だ。)

(：鴉が啼いてゐる。君に聞えるか、鴉が啼いてゐるぞ。何處から此様に飛んで來たのだらう！空も黒む程だ。天下に可畏物なしの僕等と列んで、鴉は宿つてゐる。何處へ行つても隨いて來る。いつも僕等の頭の上に居るから、黒レースの傘を翳してゐるやうで、又葉の黒い木の動く蔭に居るやうだ。一羽僕の面の側へ來て突つかうとした。彼

奴僕を死人と間違へたのだらう。鴉が啼いてゐる、少し氣になる。何處から此様なに飛んで來たのだらう?)

(：昨夜僕等は睡蓋けた敵を塵殺しにした。鴨を仕留める時のやうに、窃と、足音を偷んで、巧く、用心して這つて行つたから、死骸に一つ躓かず、鳥一羽起たせなかつた。幽靈のやうに、忍んで行く、それを又夜が隠して呉れる。哨兵は僕が片付けてやつた、突倒して置いて、聲を立てぬやうに咽喉を締めたのだ。少しでも聲を立てられたら、百年目だからなあ、君。しかし聲を立てなかつた。

殺されると思つてゐる暇が無かつたやうだ。

箒がぶす／＼燻つてゐる。敵は其側に眠てゐた。我家で寢臺に臥たやうに、安心して眠てゐた。其處を僕等は一時間餘も屠つたのだ。斬らぬ中に眼を覺したのは幾人もなかつたが其様な奴等は悲鳴を揚げて、無論赦して呉れといった。喰付きもした。一人の奴なんぞ、僕が頭を引摺むと、掴みやうが悪かつたので、左の手の指を咬み切りをつた。指は咬み切られたが、其代り見事に首を引捻つてやつた。如何だ、君、これなら帳消しになるまいか？いや、皆能く眠込んで居やがつたよ！ 骨を

斬れば、ポキンといふな、肉を斬れば、ザクツと

いふのだ。それから丸裸にして置いて、お四季施の分配をやつたが、君、串戯いふと思つて怒つちや不好せ。君は小六かしいから、それちや野武士臭いといふかも知れんが、仕方がないさ。僕等だつて殆ど裸だもの。全然着切つて了つたのだ。僕は疾うから何だか女の上衣のやうな物を着てゐるのだ。これちや常勝軍の將校ちやなくて、何かのやうだ。

それはさうと、君は結婚した様だつたな？それちや、此様な手紙を見ちや、悪かつたらう。しか

し：なあ、君、女に限るぞ。えい、糞、僕だつて
青年だ、戀に渴してゐるんだ！おツと——君にも
約束した女が有つたつげな？君は何處かの令嬢の
寫眞を僕に示せて、これが僕の婚約した女だとい
つた事があるせ。寫眞には何だか悲しい、非常に
悲しい、哀れな事が書いてあつたつげ。而して君
は泣いたせ。何を泣いたのだつげな？何でも非
常に悲しい、非常に哀れな、小さな花のやうな事
が書いてあつたつげが、何だつげな？君は泣い
たせ、——泣いてく、泣き立てたせ：見とも
ない、將校の癖に泣くなんて！

（…鴉が啼いてゐる。君、聞えるだらう？鴉が啼
いてるぞ。何だつて彼様に啼くのだらう？…）
此後は鉛筆の跡が消えてゐて、署名も讀めかね
た。

不思議だ。此人の戦死したのが知れても、私は
些とも哀れと思はなかつた。面を憶出すと、判然
浮ぶ。優しい、しほらしい、女のやうな面相で、
頬は桃色、眼中は清しく、朝の如く潔くて、髻は
柔かなむく毛で、これなら女の面の飾りにもなり
さうに思はれた。書物や、花や、音楽を好み、總

て粗暴な事が嫌ひで、詩など作つてゐた。批評家の兄が中々巧みだといつてた位だ。が、此人について私の知つてゐる所を憶ひ出したのでは、どうもこの鴉啼きや、夜襲の血の海や、死と調和せぬ。

：鴉が啼いてゐる：

ふツと、瞬間、調子外れの何とも言ひやうもない嬉しい心持になつてみると、今迄の事は皆偽で、戦争も何も有りはせん。戦死者もなければ、死骸もない。思想の根底が揺いで便りなくなるなぞと、其様な怖ろしい事も有るのではない。私は仰向に臥て、子供のやうに怖ろしい夢を見てゐる

のだ。死や恐怖に荒されて寂然となつた無氣味な部屋々々も、人の書いた物とも思へぬ手紙を手に持つた私も、皆夢だ。兄は生きてゐて、家内の者は皆茶を飲むでゐる。茶器の物に觸れて鳴る音も聞える。

：鴉が啼いてゐる：

いや、矢張事實だ。不幸な世の中——それが事實では有るまいか？ 鴉が啼いてゐる。理性を失つた狂人や、無事に苦しむ文士などが、安直の奇を求めて思ひ付いた空言ではない。鴉が啼いてゐる。兄は何處に居るか。氣品の高い、温順な、誰

にも迷惑を掛けまいと心掛けてゐた人だ。兄は何處に居る？ さあ、忌々しい解死人めら、返事をしろ！ 呪つても足らぬ悪黨めら、牛馬の屍肉に集つた鴉めら、情けない愚鈍な畜生めら、——さあ、手前達は畜生だ、——世界の人の面前で手前達に聞いてゐるのだぞ！ 何咎あつて兄を殺した？ 手前達に面があるなら、頬打喰はしてやる所だが、手前達に面はない。手前達のはそれは肉食動物の鼻面といふものだ。人間の風をしてゐても、手套の下から爪が見えるでないか？ 帽子の下から畜生のひしやげた脳天が見えるでないか？ 幾ら利

口さうな口を利いても、手前達の言ふ事には狂氣じみた所があるわ。鋪錠のぢやらくいふ音がするわ。己は己の悲しみ、憂ひ、侮辱せられた思想の力の有丈を盡して、手前達を呪ふぞ、この情けない愚鈍な畜生めら！

(最後の断片)

「生存上新生面を開くのは諸君の任務でありま

す、」と辯士は叫むだ。此人は「戦争を戡めよ」と書いた文字が皺でよれくになつた旗を揮りながら、手で釣合を取つて、辛うじて小さな圓柱の上

に立つて居るのだ。

「諸君は青年である、諸君は未來に生活すべき人である。宜しく此の如き狂暴慘酷なる事と關係を絶つて、以つて自己の生命を保つべきである、未來の國民の種を保全すべきである、我々は今日の慘状を見るに忍びぬ。之を目撃しては眼中の血走るを禁せぬ。實に天が頭上に落懸り大地が足下に裂けるやうな感がある。諸君……」

此時群衆が尋常ならぬ動搖を作つたので、辯士の聲は其に消壓れて一しきり聞えなくなつたが、實に靈でも籠つて居さうな、物凄い動搖であつた。

「假りに我輩は氣が狂つてゐるとするも、我輩の云ふ所は眞理である。我輩には父があり兄弟があるが、皆戰場で牛馬の屍の如く腐敗しつゝある。宜しく箒を焚いて、穴を掘つて、武器を鑄潰して埋めて了ふが好い、軍人を捕へてその燦たる狂氣服を剥いで、寸裂して了ふが好い。我々は最早忍ぶことが出来ぬ…… 同類が死につゝあるのである……」

ト云ふところを、誰だか、何でも脊の高い男だつたが、撲飛ばしたので、辯士がころ／＼と轉げ落ちる、旗が颯とまた翻つて、又倒れる。跡は直

ぐ紛々となつて了つたので、辯士を撲飛した奴の
面をツイ認める暇もなかつた。俄かに其處ら中が
皆動き出して、揉合ひ、押し合ひ、押し反し、喚
き叫ぶ。石塊根棒が空を飛び、誰を打つ拳だか頭
上に閃めく。群衆は靈ある浪の吼る如く哮り立つ
て、私を宙に釣上げたまゝ、數歩の外へ運んで行
き、いやと云ふ程垣根へ打付けて、又後戻りして
今度はあらぬ方へ逸れ、到頭高く薪を積上げたの
に推付けて了つたので、積み上げた薪が傾いで、
あはや頭上へ崩れ落ちさうになる。何かバチ／＼
と燥いだ音が頻りにして、材木にバラ／＼と中る

ものがある。と、静まる——かとする、又更に
ワツと云ふ。鰐口開いて叫ぶやうな、太い大きな
聲で、人間離れしてゐて物凄。またバチ／＼と
燥いだ音がする。誰だか側で倒れたから、見ると
眼の在る處に眞紅な穴が二ツ洞開て、血が滾々と
流れて居る。此時重たい根棒がブンと空を切つて
來て、其端が顔に中ると、私は倒れたから、踏躓
る足の間を無暗に這脱けて空地へ出た。それから
何處かの垣根を越えて、一つ残らず爪を剝して、
薪を幾側も積上げたのへ攀ち登つた。中で一側體
の重みに崩れたのが有つたので、私はグッラ／＼

と飛散る薪と一緒に消飛んで、四角な穴のやうな
中へ落ちたが、辛うじて其處を這出ると、轟々バ
チ／＼と云ふ音が後から追蒐けて来る。何處
でか半鐘が鳴る、五階建の家でも崩れたやうな、
怖ろしい音も聞える。黄昏が凝付いたやうに、中
々夜の景色にならず、彼方の銃聲、叫喚の聲が赤
く色づいて夕闇を跡へ／＼押戻したやうな趣があ
る。最後の垣を飛降りると、其處はめくら壁に左
右を劃られた、廊下のやうな、曲り拗つた狭い横
町で私は其處を駈出した。久らく駈けて行つて見
たが、つんば横町で、行止りは垣根、其向うには

又薪や材木の積むだのが黒々と見える。で、又踏
めば崩れて踏應へのない嵩高な積薪を攀登つては
何だか寂然として生木の匂のする井戸のやうな處
へ落ち、落ちては又這上つてゐたが、どうも後を
振向いて見る氣になれない。また朦朧と薄赤く影
が射して、黒ずんだ材木が巨人の亡骸のやうに見
えるから、振り向いて見んでも、大抵様子は知れ
てゐる。もう面の傷の出血も止まつたが、面が滯
感覺になつて、我面のやうには思はれず、宛然石
膏細工の面を被つてゐるやうな心持がする。やが
て眞闇な穴へ落ちた時、氣が遠くなつて遂に正體

を失つたやうにも思ふが、眞に正體を失つたのか、失つたやうな氣がしたのか、どつちだつたか分らぬ、私の覺えて居るのは、唯駈けて行つた事ばかりだ。

それから久らく街燈も點いてゐぬ知らぬ町々を駈廻つたが、何方向いても、眞黒な、死んだやうな家ばかりで、その寂然とした迷宮の中を脱出することが出来なかつた。方角を付けるのには、立止まつて四下を視廻はすが肝腎だが、それが出来ない。遠方に聞える轟々といふ物音や、ワツと云ふ人聲が動もすると段々追付きさうになる。時には

ふツと角を曲らうとして、正面に其聲に打付かる事がある。聲は赤黒い球になつて舞揚る烟の中から赤々と響いて来る。それツと引返して、また後になる迄走る。去る曲角で一條燈火の射してゐた所があつたが、側へ行くと、ふツと消えて了つたのは、何處かの商店で急に戸を閉切つたのであつた。廣い隙間から帳場の臺の片端と何だか桶のやうなものが見えて、忽ち寂然と潜むだやうに暗くなつた。其商店から遠くは離れぬ處で向うから駈けて来る人に出逢つた。暗闇でもう二足で危なく衝當らうとして、互に立止まつた。誰だか知らぬ

が、眞黒な…、身構をした人の姿が見える。

「君は彼方から来たのか？」

「さうだ。」

「何處へ行くんだ？」

「家へ歸るのだ。」

「む、家へか？」

相手は少し黙つてゐたが、突然私に飛蒐つて、推倒さうとする。咽喉元を探り當てやうと、搔き廻す冷たい指先が衣服に絡まつてやツさもツさしてゐる暇に、私はその手に喰ひ付いて、振腕つて置いて駆出した。相手は人も通らぬ町筋を靴音高

くまばらく追蒐けて来たが、其中に後れて了つた
— 大方喰付いてやつた處が痛むたのであらう。

如何してか、フト吾住む町へ出た。矢張街燈もない町で、家々は死んだやうに、火影一つ射す處もなかつたから、これが吾町とは氣が附かずに駆通つて了ふ所であつたが、偶と目を舉げて見ると、我家の前だ。が、私は久らく躊躇してゐた。多年住慣れた家ではあるけれど、吐く息が荒ければ悲しげに物に響く、此の死んだやうな變つた町中で見ると、我家のやうには思はれない。躊躇してゐる中に、や、顛んだ時に鍵を落しはせぬかと思ふ

と、愕然として氣も坐ろになり、遮二無二捜して見れば、なに、鍵は外隠袋にあつた。で、錠をカチリと云はせると、其の反響が高く變に響いて町中の死んだやうな家の戸が一時に颯と開いたやうな心持がした。

：初は床下に隠れて見たが、それも佗しく、且つ眼の前に何かちらついて見えるやうで無氣味だつたから、窃と内へ忍び込む。暗黒を手探りで方々の戸締りをし、さて勘考の末道具を押付けて置かうとしたり、それを動かす毎に怕しい音がガランとした家中に響き渡る。これに又膽を冷して、

「えい、」と思切つて、「このまゝで死なば死ね。如何して死んだつて、死ぬのは一つだ。」

洗面臺にまだ生温い湯があつたから、手探りで面を洗つて、布片で拭いたら、面の皮が釣れて傷がヒリ／＼傷む。鏡で見やうとして、マツチを點けて、そのちら／＼と弱い火影に透して見ると、暗黒に何だか醜い無氣味な物が居て、私の顔をぢろりと見たので、狼狽てマツチを棄て、了つた。が、どうやら鼻がめツちやになつて居るらしい。「もう鼻なんぞ如何なつたつて構はん。満足だつて仕方がない。」

かう思ふと、愉快になつて来た。芝居で盗賊の役でも勤めて居るやうに、奇怪な身振や顔色をしなから、ブフェーへ行つて、残物を探し出した。探すに何も身振をする必要はない。それはさうとも思ひながら、其癖面白くて身振が止められなかつた。ひどく飢えてゐる積りで、矢張り奇怪な顔色をしながら、物を喰つて居た。

眞暗で寂然としてゐるのが無氣味だつたから、庭の覗窓を開けて、聴耳を引立てると、戶外はもう馬車一つ通らぬから、初は矢張寂然としてゐるやうに思はれて、もう銃聲も止むだらしい、――

と思ふ側から、幽に遠く人聲がする。叫聲も、笑聲も、何かグッラ／＼と崩れる音も、物に紛れずして、やがてそれが判然と手に取るやうに聞えて来る。空を瞻ると、赤黒い物がサッと飛んで行く。向ひの納屋も庭先の敷石も、犬小舎も、矢張ぼつと薄赤く染つて見える。

「チブツーン！」

と窺と窓から犬を呼んで見た。

犬小舎では何も動く氣色がなく、側の鎖の切れたのが赤黒く煌々と見えるばかり。が、遠方の叫聲や、何やらの崩れ落ちる音が、次第に高くなつ

て来たから、私は視窓を閉めて了つた。

「段々押寄せて来る！」

隠れ場所を探さず、ストーヴの戸を開けたり、塗込め暖爐を探つたり、戸棚を開けたりしてみたが、そんな物では間に合はぬ。部屋々々をも歩き廻つて見たが、書齋だけは覗く氣になれなかつた。屹度兄が肱掛椅子に腰を掛けて、書物に埋つたテールに對つて居ると思ふと、餘まり好い心持がしない。

と、次第に歩いてゐるのは私一人でないやうに思はれて来る。まだ幾人か近くの暗黒を黙つて歩

いてゐる者があつて、殆ど私と擦れくになる事もあるやうだ。一度其中の誰やらの息が領元に觸れて慄然と總毛立つた事もある。

「誰だ？」と私は小声でいつて見たが、返事が無い。

又歩き出すと、無意味な奴が黙つて跡に跟いて来る。加減が悪いので、それでこんな氣がするのだ、さう云へば熱も出て来たやうだ——と思ふけれども、恐ろしさを如何することも出来ん。寒氣でもするやうに身體が慄へて、頭に觸つて見ると、火のやうに熱い。

「チヨッ、書齋へ行かう。何と云つても他人よりか好い。」

兄は果して肱掛椅子に倚つて、書物に埋つたテ
ーブルに對つて居たが、今は彼時のやうに消えも
せぬ。帷を卸した隙から外の明りが薄赤く射して
ゐるけれど、物を照らす程でもないから、兄の姿
はぼんやり見える。私は兄とは懸け離れて、ソフ
アに腰を卸して成行を見て居た。書齋は静かで、
のべつに轟といふ音、何かのグワラ〜と崩落ち
る音、其處此處の叫聲が幽かに聞えてゐたのが、
次第に近く押寄せて来る。赤黒い光は益々強くな

り、肱掛椅子に凭つた兄の、眞黒な、鑄鐵で作つ
たやうな半面が、その細い赤い線の中に見えるや
うになつた時、

「兄さん！」

と呼んでみた。

が、黙つて居る。石碑のやうに凝然と眞黒に居
竦まつてゐる。隣室の床板がピシリと爆て、急に
妙に寂となる。澤山な死骸の中にでもゐるやうだ。
音と云ふ音は皆消えて、赤黒い光までしんめりと
した死の影を宿して、凝たやうに動かなくなり、
其色も稍薄れる。この寂しさは兄からと思つて、

其通りを云ふと、

「いや、己の所爲ぢやない。窓を覗いて御覽。」
帷を引除けて——私はたちくとなつた。

「おゝ、この故爲か！」

「家内を呼んで来て呉れ。彼はまだ見たことがないから、と兄がいふ。」

嫂は食堂で何か裁縫をしてゐたが、私が行くと、針を縫物に差して、言はれる儘に起上り、私の跡に隨いて来る。窓々の帷を皆引除けたら、薄赤い光が、廣い入口を射て、思ひの儘に室内へ流れ込むのだが、何故だか内は明るくはならないで、矢張

暗かつた、唯窓だけ四角に赤く大きく燦然と明るく見えた。

皆で窓際へ行つて仰いで見ると、家の壁や軒蛇腹から、直ぐ火のやうに眞紅な、平坦な空になつて、雲も日も星も麗けずに、其儘地平線の彼方に没したやうに見える。俯して見れば、矢張平坦な赤黒い野が死骸で埋つて居る。死骸は皆裸體で、足を此方へ向けて居るから、此方からは唯跡と三角の顚の下が見えるばかりだ。寂然としてゐる——皆死骸と見えて、際限もない野に置去りにされた負傷者らしい者は一人も見えなかつた。

「段々殖えて来る」と兄が云ふ。

兄も窓際に立つて居たが、母も妹も家内中残らず此處に居る。誰も面は能く見えなかつたが、唯聲でそれと知れた。

「そんな氣がするんだわ」と妹が云ふ。

「いや、殖えて来るのだ。まあ、見て居て御覽。」

成程、死骸は殖えたやうだ。如何して殖えるのかと、凝然と注目して居ると、とある死骸の隣、今迄何も無かつた處に、フト死骸が現れた。どうやら、皆地から湧くらしい。空いた處がズン／＼塞がつて行つて、大地が忽ち微白くなる。微白く

なるのは、蹶を此方へ向けて、列んで臥てゐる死骸が皆薄紅いからで、それにつれて室内もその死骸の色に薄紅く明るくなる。

「さあ、もう場所がない」と兄が云ふ。

「もう此處にも一人居るよ」と母が云ふ。

皆振向いて見ると、成程背後にも一人仰反つて倒れてゐる。と、忽ちその側へ一人現れ、二人現れる。跡から／＼湧いて出て、薄紅い死骸が行儀よく並び、忽ち部屋々々に一杯になる。

保母が、

「坊ちやん達のお部屋にも出て来ましたよ。私見

「参りました。」

妹が、

「逃げて行きませう。」

兄が、

「出道がない。御覽、もう此通りだ。」

成程、死骸は其處ら中に素足を投出し、腕を聯ねて、ギッシリ詰まつてゐる。それが見るゝ蠢めき出して、悔とする間に、皆行儀よく列むだまゝ、むくゝと起上る。新しい死骸が地から湧いて出て、奮から在るのを推上げたのだ。

「かうして居ると、首を締められる。窓から逃げ

ませう。」

と私が云ふと、兄が、

「いや、窓からはもう逃げられん！ 駄目だ！

それ、あれを御覽！」

∴窓外には、赤黒い光りの凝つた中に赤い笑が見える。

血笑記終

明治四十一年七月五日印刷
明治四十一年七月七日發行
大正元年九月五日第四版印刷(總刷本)
大正元年九月十日第四版發行(總刷本)
定價金參拾五錢

著作權相續者

長谷川玄太郎

發行

東京市京橋區築地二丁目十五番地
靱山仁三郎

印刷

東京市赤坂區南町三丁目五三番地
小松周助

印刷

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行

東京市京橋區築地二丁目十五番地
大阪市東區南久太郎町三丁目
靱山書店

振替貯金(東京二四一七番
大阪一三六八六番)

270
471

終

縮
刷
本